

支考の俳壇経営

「国の花」を中心に

支考は蕉風俳諧の勢力を全国的におし拡げたのであるが、その中心基盤は美濃地方にあった。

この稿では、美濃地方の支考の門下、並びにその賛同者の分布について考察してみた。

支考に次のような三月十一日付けの呂錐・六之宛の書簡がある。

前書に申入候 此度国の花大分の物に候間板行代殊之外
せわしく わたさねばほらぬとやら申候 井筒屋所さん
用相渡し申候 其節本代にてひかへ申筈に御座候 御両
人より金子貳両御かし可給候 算用大かたに仕舞候て
金子貳両たらず残申候処是にて嶋わたりいたし候半事
心ぼそく存候 其内弁当代は有範・東羽より 金参歩貴
様方へ御請取可給候 其外さん用は入込候間 其許にて
可被成候 右の金子重てさん用可仕候間 仕切どもうせ
ぬ様に可被成候

一、此度金子貳両御かし可給候 源七道中持あるき候事

小 瀬 渺 美

如何に候間 又柴田見世とかわせに可給候也

一、武兵衛方より金参両請取申候 此度又貳両被下候へば 大てい四両半借用申事に可有之候

一、此度 国の花本代□□より直に北野へ参候様に可申遺候間 御両所の内へ請取可給候

三月十一日

支 考

呂錐様
六之様

この書簡には、年次の記述がないので、その辺から考えてみたい。

先ず、この書簡から「国の花」出版の具体的条件についての折衝がすすんでいること、その出版費用の支払いになり工面を重ねている経緯、旅費が心もとないため、郷里の心許せる呂錐・六之両名に借り入れを申し入れていることなどを知らることができる。

そして「此度国の花大分の物」を書肆井筒屋から出版するにあたり、「板行代殊の外せわしく」前金で支払わなければ、板屋が板木を彫らぬとして、井筒屋庄兵衛との間に交渉が続けられ、支考は、刊行後、本代支払いの時に、前金支払い分を相殺する条件でながしかを支払ったものと思われる。

また一方、この「国の花」の本代として、郷里北野へ払い込まれるので、呂錐・六之両名で受領しておいてほしい旨の依頼をしていることや、「其外のさん用は入込候間」其許にて可被成候」以下のことばから、「国の花」の出版およびその収支の経理については、右の両名がかなり深くかかわっていたことも推測できる。

それは兎も角として、刊行された「国の花」は、「宝永元年十月朔」の序をもっており、十二巻八冊より成っている。大きさは、二十四・一センチ、ヨコ十六・七センチ。八冊、十二巻。

各巻の題簽・内題等には多少の相違があるので、ここで一覧にして示すことにする。

冊	題	簽	各巻内題	丁数	備考
1	国の花	第一神あそび	神あそび	十六	含内表紙一
		第二優曇華	優曇花	四	部首目録二
2	国の華	第三絵合	絵あはせ	二十六	含表紙一
3	国の花	第四藪の花	藪の花	五十六	含表紙一

8	国の花	第十二かたはし	かたはし	三十九	
7	国の華	第十一村雀	村雀	十三	
		第十花鳥相撲	花鳥相撲	十五	
6	国の花	第九峯の木立	峰の木立	二十二	
		第八岐山の松風	岐山の松風	八	
5	国の花	第七糸貫	糸ぬき	八	
		第六里桜	里桜	十三	
4	国の花	第五花鳥六景	花鳥六景	四十九	

右のように、それぞれが各巻独立した十二巻となっており、それを「国の花」の題名でまとめた形をとっている。成立の時期は各巻の序跋から推定することができる。各巻の序跋等に記されている年月を抜き出してみると次の通りである。

神あそび

序 宝永元年十月朔

願主(支考)

跋 宝永はじめのとし師走廿五日

闇如

優曇花

序 宝永元十月日

可吟

藪の花

序 宝永甲申のとし神無月末の日

嘯風

花鳥六景

序 元禄丁丑のとし

獅子庵(支考)

奥書 宝永元初冬之日

二竹堂有隣

里桜

序 宝永のことし十月帰花の節

如冉

岐山の松風

序 宝永元年申歳

己百

花鳥相撲

序 維時宝永開元ママの冬しはすの月

扨言

村雀

序 宝永甲申の冬

素台

かたはし

序 宝永甲申の冬

木因

となっている。

これらのことからわかるのは、各地撰者のもとで、別々に編集がすすめられたと思われることで、全体の成立の大凡の時期は、序跋から察すると、最も早いのは元禄丁丑のとし（元禄十年。「花鳥六景」獅子庵ニ支考序）、最も遅いものが、宝永元年十二月二十五日（「神あそび」闇如跋）ということになっている。いずれにしても、全十二巻の成立は宝永元年冬ということになる。

この原稿の成立から推して、この書の板行は翌宝永二年となり、書簡の日付二月十一日は宝永二年であったことが知られる。

とすれば、書簡中の「金子式両たらず残申候処是にて嶋わたりいたし候半事 心ぼそく候」のことは、支考が宝永二年四月、伊丹を出発して、池田・西宮などを経て、い

わゆる乙酉紀行といわれる西国路の旅であったことも知られる。

ここで「国の花」の内容の概略を眺めておきたい。まず、連句について眺めてみる。連句は歌仙が最も多く、三十一巻に及ぶ。次に歌仙各巻の作者は次のようである。

- ・可吟・吏明・支考・黒太・指算・碧川の六吟（優曇花）
- ・角呂・芦文・箕十の三吟（絵合）
- ・鯉欽・犁百・鷺谷・梨旭・舟闇の五吟（同）
- ・正勝・助伊・芦弓・一笛・鳥紅の五吟（同）
- ・嘯風・魯九・国騷の三吟（藪の花）
- ・国騷・嘯風・溝鮑・露寒・木皮・可弓・雪朝・枝鳥の八吟（同）
- ・是柳・国騷・嘯風・岩獅・鷗小の五吟（同）
- ・猿之・栢舟・二竹・越外・黄蝶の五吟（花鳥六景）
卷▽
- ・巢漁・暮三・素休・規外・石推の五吟（同）
△二巻▽
- ・如冉・支考・二竹・可白の四吟（糸貫）
- ・光清・支考・有範・英次・呂錐の五吟（同）
- ・己百・一水・湖翁・友吟・樗扇マの五吟（岐山の松風）
- ・白糸・松楓・喜朝・甘谷・梅角の五吟（同）
- ・唾鷗・春帆・紫閣・支団・用和・霞汕の六吟（峰の木立）
- ・用和・紫閣・霞汕の三吟（同）

・六合子・栢舟・金刀・芳山・用和・秋麿の六吟(同)

・素秋・律平・桔梗・橘士・轍鮒・秋麿の六吟(同)

・芳山・紫英・吟紫の三吟(同)

・卮言・桃水・在竹・梅夕・園山の五吟(花鳥相撲)

・在竹・龍雀・湖遊・桃水の四吟(同)

・素台・水石・友江・甫堂・如桂の五吟(村雀)

・露白・栢五・李残・角芝・如翠・呂虹の六吟(同)

・露川・素台・素覽・如桂・水谷・甫堂・角芝・李残・呂

虹・露白・如翠・栢五・石上・林下・螢石・野入・水音・

一蓬の十八吟(同)

・木因・歌十・左蚶・指月・某邑・泊舟・侶椎・波乘・千

藤・芹イ・一放・曲枕・芦風・柳水・嵐歌・蘭十・己千・

旨燕・一藁・柳葉・其後・鷄夕・清川・伊山・雲外・砂

石・知香・柳糸・野馬・金士・木巴・里任・桂士・竹寄・

前川及び執筆の一巡(かたはし)

・大川・木因・涼菟・歌十・歌三・芦本・己千及び執筆に

よる七吟(同)

・木因・里任・一藁・唯香・一松・南枝・蘭遊の七吟(同)

・里任・竹寄・林山・唯香・梅夕の五吟(同)

・支考・里任・二竹・如冊・唯香の五吟(同)

へただしこの巻は挙句が作者「筆」とのみあり、句が欠

けている。▽

・竹之・桂士・梧鳥・意川・木水の五吟(同)

これらの連句での連衆は、黒太・芦文・嘯風・二竹・己

百・木因など各巻撰者や魯九・規外・右範・大川などそれ
ぞれの地方の有力俳人を中心としたものがほとんどである
が、このうち四巻に支考が連座している。

こうしたことから、連衆については各巻ともそれぞれの
地方の俳人を中核としたものが多く、そのことは逆に各巻
撰者の意向のもとに、各地グループのまとめり、地域勢力
の結集ということが、連衆決定、運座推進のねらいであつ
たとみることが出来るように思われる。

次に発句について眺めてみる。文中に含まれる句を除い
て、各巻入集の発句数は、巻別にみると次の通りである。

神あそび 五十三句

優曇花 十八句

絵合 二百四十七句

藪の花 四百四十句

花鳥六景 二百六十一句

里桜 百五十二句

糸貫 七十五句

岐山の松風 三十七句

峯の木立 百三十九句

花鳥相撲 百二十一句

村雀 九十四句

かたはし 百三十句

となり、その総句数は千七百六十七句にのぼっている。

このうち支考の作品は
 甥達によい茶申さふとし忘れ
 踊子の笠ならべたるぼたん哉
 木曾ちかし喬麦はましろの山続
 など、七十六句を教えることができる。
 この千七百六十七句に及ぶ「国の花」入集の発句は、作者の重複がみられるので、ここでは、作者数を地域別に眺めてみたい。
 各巻の配列順は次のようである。

神あそび
 絵合
 藪の花

巻名	郡名	地域名	入集俳人数
神あそび	山県	北野・三輪	八
優曇花	武儀	洲原	六
絵合	加茂	関	四九
	加茂	深田	二二
	可児	御嶽	一八
	〃	錦織	九
	加茂	黒瀬	一三
	可児	兼山	二七
	加茂	和知	五
	武儀	麻生	七
	加茂	川辺	九
	〃	蜂屋	一八
	方県	岩崎	二三

合計	花鳥六景		里桜	糸貫	岐山の松風	峯の木立	花鳥相撲	村雀	かたはし
	不破	府中							
十一郡 三十一地域 四四九名	石津	岩手	方県	本巢	厚見	厚見	羽栗	〃	本巢
	牧田	岩手	方県	神海	岐阜	加納	笠松	竹ヶ鼻	美江寺
	河渡	岩手	黒野(下西郷・三俣・小野・芦布・岩利・太田・則松・村山)						十五条
									小柿・三橋・北方
									大垣
									安八
									安八
									〃
									〃
									安八
									神戸

このように十一郡、三十一地域、小字を含めると三十九地域にわたり、その入集作者数は、他地域から旅の途次訪れたり、文通による入集者を省いても四百四十九名にのぼっている。

地域的に、入集俳人の多いのは、関、厚見(加納)、方

県(岩崎・黒野)などで、いずれも各四十名を超えている。こう整理してくると、「国の花」における支考俳諧圏の美濃での拡がり、かなりのものであったということができさる。

ところで、「国の花」の巻頭におかれた「部立目録」の末尾に

郡府 十一郡
 所名 三十一所
 部立 十二部
 巻数 八卷

とあって、作品収録の区域は、十一郡三十一地域とされている。具体的に収録されている地名を挙げると次のようになる。

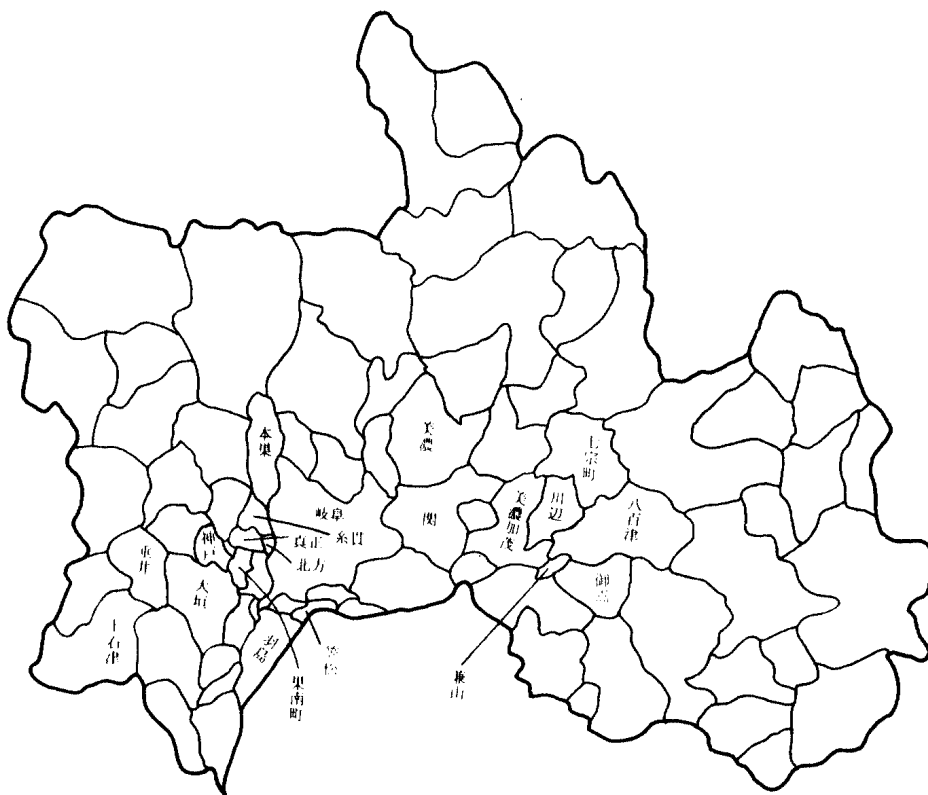
郡名	地域名
山県	北野・三輪
武儀	洲原・麻生
加茂	関・深田・黒瀬・和知・川辺・蜂屋
可児	御嶽・錦織・兼山
方県	岩崎・河渡・黒野(下西郷・三俣・小野・芦布・岩利・太田・則松・村山)
不破	垂井・府中・岩手
石津	牧田
本巢	神海・美江寺・十五祭・小柿・三橋・北方

厚見	岐阜・加納
羽栗	笠松・竹ヶ鼻
安八	大垣・神戸・赤坂

これは「国の花」が編集された宝永初年の郡名、町村名に従っているのは当然であるが、その後行政区画の変遷、市町村の分離・統合が繰り返かえされているので、現在の市町村名に従って区分すると次の通りとなる。

郡市名	町村名
岐阜市	(加納を含む)
大垣市	
関市	
羽島市	
美濃市	
美濃加茂市	
羽島郡	笠松町
本巢郡	本巢町・巣南町・真正町・北方町・糸貫町
安八郡	神戸町
不破郡	垂井町
養老郡	上石津町
加茂郡	八百津町・七宗町・川辺町
可児郡	御嵩町・兼山町

支考俳諧圏の広がり



この現行政区域名でみると、六市十四町の広がりを持っている。

これを現行政区域画地図によって示すと上の通りであるが、これは、東濃地域の一部を除いて、美濃の街道筋を中心とした交通至便の地のほぼ全域にわたり、当時の人口密度などを思い合わせるとき、美濃派勢力の浸透ぶりの強さを物語るものと言えよう。

「国の花」は、以上述べて来たように、美濃に根ざした俳書ということになるのであるが、ここで各巻の撰者について考えてみると、各巻の撰者は

- | | | |
|-----|-------|----|
| 第一 | 神あそび | 支考 |
| 第二 | 優曇花 | 黒太 |
| 第三 | 絵合 | 芦文 |
| 第四 | 藪の花 | 嘯風 |
| 第五 | 花鳥六景 | 二竹 |
| 第六 | 里桜 | 如冉 |
| 第七 | 糸貫 | 光清 |
| 第八 | 岐山の松風 | 己百 |
| 第九 | 峰の木立 | 芳山 |
| 第十 | 花鳥相撲 | 卮言 |
| 第十一 | 村雀 | 楚台 |
| 第十二 | かたはし | 木因 |

となっている。これによると、すべての撰者が、本来の支考門の俳人というわけではない。

すなわち、「岐山の松風」の撰者「百は、法名日賢、岐阜梶川町の日蓮宗妙照寺第七代の住職で、芭蕉が貞享五年に岐阜を訪れた折には、安川落梧の意を受けて芭蕉を案内し、芭蕉の宿泊の便をはかった。

以後蕉門俳人として活躍した人物であり、「曠野」にも入集し、落梧、賀嶋鷗歩らと共に岐阜の俳壇に重きをなしていた人である。

「かたはし」の撰者谷木因は、初め北村季吟の門で、芭蕉とはいわば同門であり、天和期の木因宛て芭蕉書簡にも「杭瀬川の翁こそ予が思ふ所にたがはず」とみえ、芭蕉も高く評価していた。芭蕉は「野ざらし紀行」の旅で木因亭へ赴いたが、木因は芭蕉の労をねぎらい、また桑名、熱田に同行するなど、芭蕉との深いかかわりが知られる。一方では如行、荆口をはじめ、大垣蕉門の俳人育成にあたるなど、大垣俳壇での重鎮であった。

「絵合」の撰者芦文は関の人、姓を佐野、別号を春花堂とも称した。惟然・箕十・角呂らと共に関の有力俳人として活躍し、のち支考門となった。正徳四年九月十八日付北野連中宛支考書簡にも

然者俳諧も名残ニ候へバ北野より一集出候而も可然候
しからバ相手ニハ芦文たのミ申度候 其中ニ物しりたる
人 無之候てハ 詩哥につかへ申候

といったことばがみられ、俳諧の理解者として支考の信頼の厚かったことが知られる。

また「藪の花」の撰に当たった嘯風は、本名を兼松甚蔵と称し、加茂郡深田村（現美濃加茂市太田町深田）の庄屋をつとめる豪商で蜂屋の堀部魯九の手引きで俳諧に親しみ、初め露川に学ぶ。また元禄十四年八月付の嘯風宛文章書簡に

支考より先頃北国筋の状参り申候 無事に越中浪化のものにて盛夏を凌ぎ 初秋まで猶風雅の物語たえぬよし
へ以下略

とみえるように、文章と深いかかわりを持ち、のち支考門となった人で、東濃地方の中心俳人であった。その息も水尺の俳号で「国の花」に名を連ねている。

これらのことから考えられるのは、各巻の撰者として、本来の支考門だけでなく、木因を初め、すでに美濃で俳人として知名度の高い人物を充てたことは、既存勢力をかかえ込みながら美濃俳壇の統合をはかろうとする意欲と、国内各地域への配慮といったものを認めることができる。

ここで、「国の花」の刊行以前に出版された「笈日記」「東華集」と「国の花」とで入集の俳人数がどのように変化しているかを比較してみると次のようである。

ここでは多少の地名異同があること、地域名が小字にまで及んでいることなどから、比較の便を考えて現在の行政区画に従って、市町村別に図示することにしたい。

合計	その他	可児郡		加茂郡			養老郡	不破郡	安八郡	海津郡	本巢郡				羽島郡	美濃加茂市	美濃市	羽島市	関市	大垣市	岐阜市	市町村名
		兼山町	御嵩町	川辺町	富加町	八百津町	上石津町	垂井町	神戸町	海津町	北方町	真正町	巢南町	本巢町	笠松町							
三五	一七																			一一	七	筈日記
一五四					二二					五			四		五一	一五	六	二〇	一六	一五	一五	東華集
四四九	七	二七	一八	一六		二七	二	一一	三			一一	一一	二二	四〇	六	二〇	四九	三〇	一四三	一四三	国の花

これらのことから推察できることは、「東華集」(元禄十三年)から「国の花」(宝永二年)の間に、支考を中心とした美濃の俳壇の急激な充実ということである。

美濃における支考一派の地域的広がり、現在の行政区画による市町村にあてはめて考えてみると、元禄八年(一六九五)の「筈日記」にみられる地名はわずか岐阜・大垣の二市のみである。これに雲水の部を加えても、入集俳人は三十五名にすぎない。ただ「筈日記」は畿内・東海などの芭蕉引杖の跡を巡遊し、その遺吟を収録することに、支考のひとつのねがいがあったわけで、その意味で美濃の地名は、その行脚の行程に従って、大垣・岐阜に限られていることも止むを得ないであろう。また地域的に岐阜・大垣以外の美濃の俳人名が見られないのも、入集俳人数が少ないもうなづけるところである。

「東華集」は「筈日記」成立の五年後、元禄十三年(一七〇〇)九月の刊行であるが、この「東華集」に入集しているのは、地域的には六市三町であるが、俳人数では、百五十四名に達している。

これが、さらに五年後、宝永二年(一七〇五)の刊行である「国の花」になると、急激な広がりを見せており、六市十一町に拡大され、収録俳人もおよそ四百五十名に及んでいる。ここに、美濃派の俳諧圏が確実に広がってゆく状況を知ることが出来ると思うのである。

そして、この「国の花」の各巻の撰者が、美濃のそれぞれの地域の中心俳人であったことなどを考え合わせると、宝永元年（一七〇四）の「国の花」の編集が、美濃における支考俳諧圏の確立という重要な意味を持つ仕事であったことになる。

そしてこの顔ぶれを通して、支考の俳壇経営の収覧方法に関わる手腕をみる事ができるのである。

以上述べてきたことをまとめてみると、「国の花」は、木因、己百、嘯風、芦文など美濃各地の芭蕉直門の有力俳人を初め、支考門の弟子を中心として編集され、そこに収められた俳人の地域的な広がりと、俳人の数という点では、「東華集」に比し、新しい地域に俳諧人口の開拓を果たしている点であり、入集俳人は「東華集」の三倍近い増加であったということを示している。これらの点から「国の花」の出版は、美濃における支考俳諧圏の形成であり、その成果がさらに後年の美濃派の全国的な組織化にもつながっていったと思われるのである。

（本学助教授）